

## カンチルととら

あるとき、とらが、カンチルをやっつけようと思って、森の中をさがしまわっていました。すると、カンチルが、一本のルースーの木の下に立っていました。ルースーの木の実は卵にそっくりです。実は枝も折れそうなほどたくさん実っていました。

とらは、カンチルのそばまで来ていいました。

「おまえはこのあいだ、ワニを野豚だといって、おれをだましたな。もう少しでやられるところだったぞ。おまえを食ってやる」

カンチルは、

「ああ、とらさん。どうか命だけは助けてください。わたしはいま、王さまの命令で、卵のなる木の番をしているところなんです」といいました。とらは、

「なんだって。王さまの卵だって。おれにも少し食わせろ」といいました。

「かんべんしてくださいよ。あなたに卵をあげてしまったら、わたしは死刑になってしまいます」

「いいや。卵をくれないとおまえを食ってやる」

「じゃあ、少しだけですよ。でもその前に、わたしを逃がしてください。でないと、王さまにつかまってしまおう」と、カンチルはいいました。そして、いちもくさんに逃げていってしまいました。

とらは、ルースーの実をひと口食べてみました。ところが、あまりにもすっぱくて、はきだしてしまいました。

「あいつめ。卵なんかじゃなくて、すっぱい木の実じゃないか」

とらは怒って、カンチルの後を追いかけてました。

とらが走っていくと、カンチルが、大きな木の下に隠れていました。

「おい、もうおしまいだぞ。おまえは、ワニを野豚だといってだまし、すっぱい木の実を王さまの卵だといってだましたな」と、とらはどなりました。カンチルは、

「ああ、とらさん。どうか命だけは助けてください。わたしはいま、王さまの命令で、大事などらの番をしているところなんです」といいました。とらは、

「なんだって。王さまのどらだって。おれにも少しはたかせろ」といいました。

「かんべんしてくださいよ。そんなことをしたら、わたしは死刑になってしまいます」

「いいや。たたかせてくれないとおまえを食ってやる」

「じゃあ、少しだけですよ。でもその前に、わたしを逃がしてください。でないと、王さまにつかまってしまおう」と、カンチルはいいました。そして、いちもくさんに逃げていって、遠くまで来たときいいました。

「とらさん、もういいよ。たたいてごらん」

とらは、木にかけてあった王さまのどらを思い切りたたきました。ところが、それは、どらではなくて、クマバチの巣だったので。たくさんのクマバチがいちどに飛び立って、

四方八方からとらにおそいかかりました。とらは、クマバチにさされてあまりの痛さになりながら走って逃げていきました。

しばらく走っていくと、カンチルが、大木のように大きなへびがとぐろを巻いて眠っている側にすわっているのを見つけました。とらは、どなりました。

「こんどこそ、命はないぞ。おまえは、ワニを野豚だといってだまし、すっぱい木の実を王さまの卵だといってだまし、クマバチの巣を王さまのどらだといってだましたな」カンチルは、

「ああ、とらさん。どうか命だけは助けてください。わたしはいま、王さまの命令で、王さまの大事なベルトの番をしているところなんです」といいました。とらは、

「なんだって。王さまのベルトだって。おれにも少しまかせてみる」といいました。

「かんべんしてくださいよ。そんなことをしたら、わたしは死刑になってしまいます」

「いいや。そのベルトをまかせてくれないとおまえを食ってやる」

「じゃあ、少しだけです。でもその前に、わたしを逃がしてください。でないと、王さまにつかまってしまう」と、カンチルはいいました。そして、いちもくさんに逃げていて、遠くまで来たときいいました。

「おうい、とらさん、もういいよ。ベルトをしめてごらん」

とらは、とぐろを巻いていたへびをつかんで、自分のお腹にまきました。身を覚ましたへびは、びっくりして、とらのからだをぐるぐる巻きにまいてしめつけました。とうとうとらは死んでしまいましたとき。

おしまい